

第36回 びわこ学園実践研究発表会報告

平成28年12月3日(土) 立命館大学びわこ・くさつキャンパス(滋賀県草津市)

びわこ学園人財育成部

12月3日、立命館大学びわこ・くさつキャンパスにて第36回びわこ学園実践研究発表会を開催しました。テーマは昨年度に引き続き「いのちと暮らしに寄り添う支援」とし、サブテーマを初代園長のことばである「本人さんはどう思てはるんやろ」として企画を立てました。午前中の講演会と午後からの3つの分科会という構成で、全体で200名を超える方々にご参加いただきました。

●午前の部

全体講演

午前の講演の部は、立命館大学大学院先端総合学術研究科教授の立岩真也先生からは「一つのための幾つか」という演題でご講演いただきました。

ALSの方の支援に関わっておられるご経験から、人工呼吸器の装着について、家族介護が前提となっている厳しい現実の中で、「本人に『生きるのか、生きるのをやめるのかの選択を迫る』、その『自己決定』のあり方は根本的におかしいのではないか。シンプルに『生きていける手立てがあるのであれば生きていけることがよい。』そのために必要な手立ては提供されるべきで、今後も日本において社会全体でそれを担うことはできるはず。また、この『介護の社会化』を具体的に進めていくために、必要な手立てとしては、器機もあるが、『人』、そして『技

である。』このような内容をお話いただきました。

短い講演の時間内で伺えたのは、先生のお考えの一旦で、先生からはご講演の中で関連する論文や書籍を多数ご紹介いただきましたので、ぜひホームページで『立岩真也』を検索し、先生のたくさんのメッセージをご確認いただければと思います。



立岩真也先生



全体会の様子

●午後の部

各分科会

第1分科会

第1分科会は「生活をゆたかに ～意思決定支援の実践～」というテーマで、①知的障害児者地域生活支援センターひまわりはうす・スコラから「自立訓練期間終了後の

進路の取り組みについて」②医療福祉センター野洲から「重症児者施設で暮らす利用者の語りから導き出した援助について」と③「感覚の過敏さをもつCさんの外出について～表出を確かめながら～」の三題が報告されました。今回の発表は、自立と本人の思い、親の声の代弁、いろいろな関係性、身体での

感じ方等いろいろなケースの意思決定支援についての報告でした。

「私たちのことを私たちめきに決めないで」、重症児者も意思決定の権利主体であり、意思決定の基本的視点は関係性の中での決定であることを改めて共有できた時間となり、今年度の実践研究発表会「いのちと暮らしに寄り添う支援」～本人さんはどう思てはるんやろ～のテーマに沿った基本に帰れる実践内容でした。



第2分科会

第2分科会は、「小集団活動、個別対応の活動実践」をテーマに、①ピアーズから「利用者の主体的な参加を目指して～表現活動の取り組み」 ②医療福祉センター草津から「『ガンバ体操』の取り組みから見えてきたこと」 ③同センター野洲から「利用者に寄り添った支援の提供を考える～加齢に伴う支援方法の見直しと職員協働の取り組み～」の三題を報告しました。環境や支援のあり方を変えることで、利用者の姿が変化し、その人らしく表現され、生活の広がりや笑顔が引き出されていく。その姿に職員が気づかされ、支援の重要性を共有し更にアプローチへ高めていく取り組みは、療育実践の重要なサイクルそのものです。助言者の白石恵理子氏（滋賀大学教育学部教授）からは、「(表現活動の目的について) 職員の視点ではなく本人さんの思いを言語化できることで活動のねらいとなるといい」「加齢に伴う変化への対応は大きな課題であるが、マイナス面への変化をどう捉えるか、エネルギーの低下が新たな関係性への展開という見方もできるのではないか。」というお話をいただきました。参加者それぞれの思いが解き放たれる機会となったことと思います。



第3分科会

第3分科会は「生活をゆたかに～多様な課題への取り組み」というテーマで、①医療福祉センター草津から「嚥下調整食の取り組み」、②知的障害児者地域生活支援センターから「障害者自立支援協議会での地域資源の開発のあり方」、③訪問看護ステーションちょこれーと。から「訪問看護ステーションが実施する『親子レスパイト』の意義」の三題を報告しました。

報告①からは、課題や取り組みには多職種の連携が重要であることは言うまでもないが、成果を入所施設内だけでなく地域にも広げていく事が可能であり重要である事。報告②からは、生活を支えるために制度を新たに作るだけでなく、よりニーズに合った制度にするために、その後も絶えず検証していく



第1分科会の様子



第2分科の様子



第3分科の様子

ことが重要である事。報告③からは、資源が不足しがちな医ケアを必要とする重症児者に対して、訪問看護の立場から継続した取り組みを行うことが、利用者だけでなく家族を含めた支援に繋がっていく事等を確認し、入所支援、地域支援を問わず、重い障害がある人たちの生活を豊かにする上で、多様な取り組みの展開が求められていることを学ぶことが出来ました。